

「稚心を去る～一流とそれ以外の差はどこにあるのか～」

著者 栗山英樹

昨今、野球界ではプロ指導者未経験監督が多くなったように思えます。福島県の高校野球においても同じことが言えます。そんな中でも、勝負をしている以上結果を残さなければなりません。プロ野球の話ではありますが、2000年以降のプロ指導者未経験で1年目で優勝へと導いた監督は、落合博満氏、栗山英樹氏、工藤公康氏の3人です。選手の戦力や故障の発生頻度、コーチ、スタッフなど様々な勝因はあると思いますが、その監督の目指すビジョンというのが明確だったのではないかと思います。特に私が気になったのが栗山英樹氏です。日本のプロ野球の監督で、国立大学出身・監督就任以前に大学教授という異色の経歴を持っています。その方の野球観や考え方に触れてみたいという思いで本書を読んだ次第です。

本書は、選手育成やチーム（組織）づくり、選手一人ひとりの役割や責任、指揮官としての心構え、プロ野球選手である前に一人の人間としてどうあるべきかなど一つ一つに深い思いを感じます。また、そこに『人間力』が問われています。私自身も本書を読み、自分を律していかないといけないと感じました。

指導者の皆さんにお勧めというより、選手の皆さんにお勧めをしたい1冊です。

目次

- 第1章 プロの責任～ファイターズの組織哲学～
- 第2章 「四番」の責任～中田翔と清宮幸太郎～
- 第3章 監督としての1000試合～7年目の備忘録とともに～
- 第4章 指揮官の責任～なぜ、自分のせいだと思うのか～
- 第5章 7年の蓄積と、8年目の問い

「当たり前のことを当たり前やる」学校生活や部活動でよく耳にする言葉だと思います。「当たり前のこと」を野球に置き換えるのであれば、「基礎・基本の徹底」だと私は思います。人としての礼儀やマナー、選手としての技術や技能など、それがしっかりと身に付いていなければ勝負には勝つことができません。その根底にあるのが『人間力』だと思います。野球が上手ければ何とかなる、野球だけやっていたらいいという考えは古いですし、自分の成長の妨げです。本書では、『人間力』を高めるヒントがたくさんあります。是非読んでいただいて、自分自身の成長に少しでもつながってくれば幸いです。